宵夜話

農商務省
和
第　共
内閣文庫
和書
類
一一三三一 號
三 冊
一七二函
二四架

大政官文庫
和書門
一一三三一號
二〇九函
四架
三册

内閣文庫
番號 和 11321
冊數 3（3）
函號 172 312

風土

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
国立公文書館
National Archives of Japan

宮川夜話草巻之三

神祇部

内外両宮

両宮元より別なれとも伊勢太神宮と称し奉る然ハ二宮ハ似たる中なり或ハ異なる宮とも称し奉る南北ハ方位に当りしとや御正殿及諸宮社大概南面なり棟ハ東西にして斬造り或宮ハ立屋作宮殿作りと云り茅萱葺掘立柱ハ大古穴に住居木に巣ひしを忘給はぬ

内閣文庫
日本政府図書
浅草文庫
明治十三年購求
五九五八番

すべて竹木は其儘縄をかけず也し
されは後世に至りしか人間なる工夫は飾り総
神慮叶ふへしとなし我朝の宗廟にまし
ませは大古の風俗の万代不易なる事は
示給ふなるへしとなりて手木鰹木と
云に記さるゝよし適ふいたるへし農家の屋上よ
有鳥杯としいふものハ鰹木にして手木ハ竹木の
本末を交叉し用ゐし形なり雄略代に至
下の屋上に鰹木は上りけると 天皇御覧給ふ事
あれハ其代ゟ神社宮殿のみハ是を用ひ

されは法わりしなり 御遷宮廿一ヶ年の間ハ
かしけ修補を加ふる事なく東西に御殿の
古地有て東に 神遷ましし時ハ西は古殿
と称し亦一年に及へは其古殿は破却して
其代ゟ新殿造立ありて東は古殿と称し
宮殿の製両宮ともに其材は皆同じ式也
乃数何間何尺といへは何丈何尺と云
諸人拝礼するハ瑞垣其外垣二重の外玉串
御門の前なり毎九月十六日外宮 十七日内宮 例幣使の附
此御門は開て官幣は納給ふに諸人内院

御正殿階下のあたりへ乱入すれとも制せす又毎正月廿一日
東武御名代武士座家は本宮にて内院へ入
階下にて拝礼有　座家は別に出入しかも御門あり

相殿別宮並武内社

御殿内に同しく祀りて相殿と称すなるは元宮神
かり次に別宮次に摂社末社あり摂社は神名帳に
日本国中三千一百三十二座作錦国に二百五十三座
有と武内の社を称し其余は武内末社と
称しまれ神徳は叙位に陥りへ次後清水

八幡宮祇園ゆき神社は武内の社にて武内は
其跡に先々の神は神霊といへり人は附し
遇不遇ある事ゆゑにさればは摂社は末社は
卑しくて勝者増しかもあはし武文の内宮は
別宮次に摂社廿四社外宮別宮次に摂社
十六社と祀されしは其謂有しと叙へし外宮
四十末社内宮八十末社の事国史にも記に
みえたり両宮に今は諸殿一百廿社は正保
年中御本社石川大隅守東武へ訴へ
給ひし送事よりて修補官より例と

あるハ社なき神なれは古きも間あり
或ハ遥拝所ハ御殿を設ずして石積せる古法
なれハ内宮別宮并遥拝所ハ皆石積なり外宮
月讀宮小俣内社下御井なと御殿を造り是ハ
御殿ハ皆中古より設る事にして
いにしへハ何れも外宮なとも定めて小さき石積
所にありて俗石神(ナゲ)神と称ふる中にも大子良(オホコラ)殿
なる南に石神と号て両宮ともに祭りし所あり
是は大子良館に近き三重の御かけにて磯(ハコ)
拝所なる例にて擬(カイハラヒ)不と也故に諸人

紙もて衣類(いるい)を飾り奉り彼石神に祈誓祈
願する事あり此外にも石神なる間あり古根に
尤俗甚猥りなる也

僧尼拝所

両宮に仏家を忌事ハ両宮忌詞の條に分
勅令なり乱世にハ仏家を混る事ありしと
いへとも此拝所ハ古よりある所なり元亨の教
かけ神宮の僧尼まて神宮に不拝一木樹の下
にて拝したりける是ハ外宮神楽ともいひし五百枝

の枝今ハ傳記随所に有しかれハ其木
枯たりといへとも古株にて今にても株遺れり

岩戸

外宮高倉山の上奥へ入事九間入口二丈余
奥ハ狭く其所石海(?)和(?)して連る者ハ隠
氣盛(?)り遍(?)通(?)ありとて此れ清浄なるとし

常燈

外宮の宮地に常燈凡五百基余皆石銅
の類ハ用いすまて檜を以作り彩色侍ざる
の古法なり　内宮にハ数度作上りし見(?)へ常
燈の数(?)来らぬ(?)す或年(?)庭に燈籠(?)出の(?)を用ひ
蝋燭挑灯(?)は用ひさる古法なり殊に夜中の条(?)
宮人樹下に集まり宇治山田上中の町川(?)清
業(?)　五(?)宮日参の輩しハ市中の御かりを(?)先て
外宮宮地古(?)ハ刈(?)に常燈古来(?)まて(?)なし(?)れ(?)
代ふ(?)より先(?)の(?)聞(?)も(?)なく其古来ハ寛文(?)
了(?)迄修補して今に存せり

風宮橋并擬寶珠（ギボウシ）

五十鈴川に架して風宮へ参詣の路なれは風の宮橋
と云なり前にも云宇治橋と等しく室町殿より宮
の御寄附にて架せしとも又南より進て此の橋
柱に擬寶珠今もの一ハ無造替りの時にして
有しか例なり明應七年と彫たる其銘は
古代の物なりや又は擬寶珠のみ古き物か
所へ西隅子鈩（カネ）の上に継所（エダ）橋あり万治年
中禁裏の擬寶珠画りある狩野探幽上京
して来画へ御仰付し条官して寫にて[illegible]

五条橋といふものの事なりとて然酬せしハ實に
画工の心得なへしと云ハ傳へ是ハ風宮の
よりも東の向遠く絵ある傳有古へ其ハ謂ハ不知信
伊勢新宮を謀りてとなり其度會清左衛
一説是に在りしいへと宮に不書は橋のものに依
橋と等しく前後の擬寶珠あり其の其謂ハ
古りかまし内宮の擬寶珠ハ柱根毎に石積
ありて後世の物も窓より又其外の御門作の云
十二所御門のみに用ゐし擬寶珠とハ余多夏成
擬寶珠ハ寛延の御造替の時新に庚りて其成

田社を元と號し、へて内宮の神宮の方に傳へしは其
始なるへし

奥玉森

前より月讀の森の南の方猿田彦大神の旧跡
五十鈴川の宮地の太神に献し奉りし遷宮後の地
神殿ハ無して只石一基を建り御陪座
前より此地を神なりとハ伊勢國一宮都波岐大明
神と崇め奉り故なるへし 両宮においてハ日本の
一宮と称し奉るへきに 此社故の一宮を祀る

事なるへし

小朝熊鏡宮

式文に内宮摂社朝日社等有りとて見ゆるも
へき神社なり保食命を祭るよりて神鏡を朝熊
神社と称し神鏡と称しハ御鏡を祭る事あり其間
ゆし事も神鏡の文を書しく一度神前に納て
けふ上にて帰しき所ハ鏡宮とも称せり社の
神鏡を世に伝へしに廃亡せしは其朝倉
寛文の比當此地を出て社遷宮あり 其時

土中より神変の形なとおほく掘出けれは一の宮随
系類様せられて其下に小蛇蟠居し実に守護
の状なるよし是正しき彼神慮に叶ひしと取
納めて殿ふ神殿なれは其内に神慮の極秘と
とゝ成に新殿の内に其の小蛇形を安置せられ
蟠居せり精舎朝倍其木田守清神主忌衆は
また粟散なかりしとかや其事今に此神秘と
祀りまつれは御しるし今に捨くり
師頼朝公は元の十餘門の川海に漂ひて漂隠
なりて上の出なれは漂隠の岳とは小頼公は

俗語なり考語東考には地の事なしと見
えりまへ宮山の宮本なり其土に迎向しく
西行長明の歌あり坂本の里
五何の根原なとは古来皆侍ったへに準りしと云

故事部

祭禮

毎年六月九月十二月を三祭礼と称し十六日は
外宮十七日ハ内宮なり斎宮御在位の時ハ斎
内親王参向し給ひ女孺達ハ舞曲を奏し給ふ此三ケ
ハなき大祭礼なりしか今ハ九月の例幣使のみ年
毎の祭礼ハ正員の禰宜参勤して内外宮
座也されは廿日に遷宮すへき御殿造営修理は
年に七十余度の神事ありしも悉く絶たり

御遷宮

廿年ハ天武天皇御位十九年九月十日勅定
ありて廿年ごとに定り九月は外宮月とし日時ハ長官申し
定む所なり

勅使参向殿上使ニ而参詣御装束ハ志摩国の神戸より
宮所の御修理ハ山城国より勅使の御役なり

山田の者ども行列古今もてなす事なり

新名所歌合

伏見帝は後宇多院永仁正安の比祭主定忠朝臣
若木田荘の神人秋門を頼みて新に神社を
名所の歌を詠し和哥八十首の書ありて判者は
前大納言為世卿なり西圖は大概其前年なりしと
りしや。石田。櫻木里。泉水杜。岩波里。三津浜。
赤城浜。河島里。藤浪里。大沢橋。岩井里
実に凡て十二所なり内若木里(河辺)三津浜の
の名所は現に三所也余は古く今に埋もれしもあれば定かならず
ならず浜中若宮河は御舟もて祭事して伝
いふ(新名所哥合は小冊也)

ホウガタメ

毎正月両宮子良館にもかまへて仕事あり又正月に
神社にて造営料正月神事なる興り其頃大主寺
の衆に例とも然るに此頃もとより勤て其頃まで常に
翁舞あり一説今は猿楽者ハ又神社摂
の衆人なり伊勢にて三座ハ古く旧し春日にては
今春三王ハ日吉の類なり翁舞ハ謡曲家秘
おもて伝ふものハ今にも能とは異なり上古神楽を
其の侭翁舞ハ皆翁の類なるべき故に世にいう

てこ時ハ忌服の人けにも所一に業ハ限せし
なり公庭屋敷も親となり坊舎も用ひ給ひて
以て社霊の傷けしハ神前に禁忌けもなり

佛閣部

常明寺

け和田郡常明寺町といふ高日山法楽院本尊
薬師なり往還より西へ丁計奥ゆ山門見ゆる神境
寺一けなり古寺なり縁記に曰 継體天皇の御宇
神宮に候て草創 聖徳太子けを本尊ハとるし

世義寺

教王山宝金剛院神宮寺の神護寺といふ 世義
寺ハ別名なり 院坊十九坊あり宗ハ吉山宗也
ことふ和ゆ建てし永禄六年ゆ宮けの西ゆ川移し
也寛文十年今け地に移せり 由来のり来山
衆ハ寺堂け古也にきとあハ 東武へ
御へありハ蝦夷料の金若干ゆり給りけ寺

互て古く一寺を立忠氏寺と云僧中興一寺山
なりしに へと云年月も知れず今当山を有る地
に帰せしより此寺に蓮台有て毎十月廿法経
読り中に本尊気付たる式あり昔より仮殿
なく修氏帰去に節り

三宝院

寺号山号来由を へて世義寺と相同し 修氏
古のありけ寺当山より川様りしハ世義寺より
前にして年月知れ氏 土佛を紹記土 山田
三宝院に有ける記もしるさず当山の事をしるハ尽く
されハ院にも四百年ほど以前へ文明年中に炎上
ありて遊焉もしるされハ今の寺坊世まで言葉のいま
なり其の別世義寺より御代を祖なり世
義寺本堂（當カ）ハいと古く彫刻の人 抱ちと見えて古朴
おして今其年数を知るへし

菩提山

本寺ハ陵川北の中村の宮の神宮寺と云ふ也菩提と
いふ寺号ハ一 聖武帝神護二年九月伊勢

太神宮に丈六の佛を作りしと續日本紀に見へたれハ
是なりとなん

弘正寺

俗楠部の大日と云ハ楠部村の丘神護山弘正寺迹
開山ハ叡尊僧正菩薩中興ハ興正なり文明の
兵火に罹りて焼失せしを後建立せしや今の
寺号ハ言のみ残り或ハ寸境内に堂塔建むと
せしかど外部に壇ハ建ハ古法ありとて
内宮神宮寺より止しむとぞ断遂にし

一重なりとて今ハ退転して

法楽舎

宇治の園田中之切と云所ニ在　號宇治安全
勅願所にて建立以来千年の今も猶相続す
三千佛と称し嘗ハ古寺なり山田にも法楽舎あれ
とも廃室に帰し跡も今ハ世義寺境内に
ありて其原ハ数代事なかりし

不動堂

明王院と云真言宗前は法楽寺に隷せし也
天正十六年秀吉公蒲生飛騨守氏郷に下知し
して造らしむ 上坂郷中にありけりと云けれ不動ハ
元法楽寺の本尊にして古仏なりと云

遍照寺

けれ郡基尾寺村にあり 一条帝の御宇
永頼是を建立す真言宗なりけり 長保二年八月
廿二日也 同年四月草創し 古来の事は記し伝ふ 今は
あかりけ小堂に本尊は其上し凡僧壱人住
昔ハ家もと西町奥に在りしと云けれ山本に移り
あ門有本に遍照中に住也ありし故勅の出と
いふとかや

大江寺

潮音山と云真言宗なり 其寺基を倭人住て
二つ大村の江村に在 本仏象は行基の古寺故に
しつ寺内にありしなり 今は本尊の外に...

成勝寺

山田上の町名留田町ニ在て本尊不動なれハ名留
の不動堂と唱ふ　真言宗本尊ハ古佛のよしなり
堂ハ新しく檜材良材なりしく長谷川等意か画
間あり絵額あり昔名留田と成勝と云人康慶にて
京より此ハ縁小の寺なりしかハ今迄も此よや一代
の福德を遷来し大覚寺末寺侍正讀
なりしと云

廣光院

宇治浦田町ニ在元ハ山田西河原ニ在て天正
年中當所へ移りしと云へり此寺院と号して
佛堂を建立せし禅宗となりて本寺何派とは云ずに
知らけ寺氏を其侍者と成し俗なれハなりし代々
の尼住職を姫と将軍家の時東武に下り大
樹君と宮嫡に寛德と知事ありて東の方に
行かれハ伊勢上人と称し宮方尼衆此郡ニ
移りありて其所ハ神楽賜ハり躍ハ今に
ますなり庫裏等殿造して上段賜ニ
の間ハ将軍家德のなにか其精彩色御妙智に
一代其尼秀吉公に服逆しけ来[illegible]

亦絶世の奇物数多侍へり

清雲院

尾上坂の少子左東照山と云浄土宗之指南所にて当代
宮君ハ神君代御上意阿茶と云女性を綾り
清雲院殿と称せり神君御生涯此御寵愛ル此
数代少しも不散此条無哉御やて曰武世の
照明個体の師あれハ郎かぶく御用かしか君の其
の後かし吉阿御子らは君代の係心刻ミ其内り
納て其知らし家よし頼りる神君其写志の感霊

し給ハ御直世代中さ係代らしめ給く無窮
の後勝別に一寺を建立し其身も移らせ給ひしか
伊ら御本にり造立なりといて今に一寺を建彼の
先係代本無し清雲院殿代の有係も門しく造りと
代々代織尾まいあり代々皆添とい僧坊の寺今
宮ニ近体して松濤代奇物書画蜀江錦九丈代かたれ
此院の数又一代書庫を建一切経を成松濤代大部
其一丈三尺大部代数数仮をしして納め院門二宗留しか
その後数是せしとことに右代其係あるとしき来由あらハ
御手引く交代ゝ頼条給の式ありと

梅香寺ハ

観音山又蓮池院と云浄土捨世派なり本由
上野君於幸梅香尼於此所にして蓮阿上人の僧
開基なり寛永の頃寅の歳より初て僧侶なりしか
此僧生涯一切経を書写して諸家の役祈り
と其後柳原家の名目と成て此所に僧なき
追々今に及僧俗の崇敬するハ此寺のミなり又
其後境内寺より一代此境内繁昌なりと申て
家に退休せしむとて来られしか禁裡より来る

見聞寂なれはいくそ迷ふ帰元しとかや

朝熊岳

勝峯山金剛證寺兜率院と云禅宗本寺
虚空蔵なり境内十二坊内三十ヶ寺ハ也と云宗
明星院慶岸院萬寿院と云 開山ハ教待
和尚中興ハ弘法大師なり其後鎌倉建長
寺廿世東岳和尚茲に移轉して源なり
後に境内明星院ハ旅僧にて六十余代の住を絶
昔ハ金剛證寺と云立して日内ハ外ハ境内なる

事なと侍りし常に不平なりしか今ハ不残本意に
後ハ來りて待事ありて是宗の僧安寛の庵を定め
其事ありハ寂に来り来り待と猿其寛者ハ
紀行或ありハ持行所と寄け筆紀行あるき
此へ法國より来りよし寺山の秋月讀経定覺
こそとかの寂寞宗にいわれハ本堂ハ禅寂再
営なり月山三の坊跡あり所謂楠頭巖一ノ田
巖朝然巖なり同宮の也より楠木下に
正成仕来宮へ使まれハ本道と覚えて下宗
まて古十町ありて今ハ来宮の序来縁して紙

ゆかしく百と年の昔ハ人跡まれなりし当山に宗寂
なれハ世に其名あり当寺の什物天目僧来の佛舎の
舎利左馬頭義朝の佩刀トコロの奉納盤ハ秋田
城介実季の所持四辺を西朝と画き其銘
巧なり甚たの称不の奇物の記しかし絶
まつ月山神代より霊跡にして仏法の本與
まさ最かに及ひ一千の附安朝無限なりて屋室
荒出現にて朝無と終りし或神詣なりとも
男女も我もへきならぬ分つてきなかなかは僧へ或ハ
明星水連滞化の音れ示せ又はさむ山處所

なりしか後代の為仏法不動の像を刻しと
云ハ今明王院其石据なり不動なりといふ明
然れ名義ハ昔も今も其に託なり実ハ仏法
の開基其後廃絶して東岳建立なりし加白
へし　毎年正月六日八日東岳北開山忌とて施〻

乾　山

乾徳山恵林寺ハ円珠山恵林院といふ
本号恵林院か妙心宗なり縁起に曰淳和帝
天長二年弘法大師開基なりしと也北辰本尊

雲根石虹ケ石といふ奇石群して庭より野間
庭ち西ちも岩石あり諸あり三十六といふ
甚険阻此の山より信州開寂の前より[illegible]し
後朝無岳実北奥の院なりと云　国志ニ[illegible]の事[illegible]

青　峯

青峯山正福寺と云真言宗なり縁起ニ曰
聖武帝御宇開山行基菩薩十一面観音
長三尺寺の[illegible]信玄[illegible]
ハ武田信玄の帰依なり昔ハ大伽藍僧坊三十坊

ゟしゝ廃絶して貞享年中御寺建立せ
再興ありて境内に鎮守岩石新宮名としいふものあり
南寺ハ此所ハ今ハなく侍り
朝熊岳虚空蔵也 志摩の三山といへは朝熊岳
ハ神境に属し宗派ハなれハ虚空蔵は
志摩国伊雑宮を合し 世人智者ハ国分と
いへと隣国他州よりして人参詣あり 詣り人多む
昔なり

古物部

保元軍画軸

福嶋御塩[ミサキ]勝太夫（山田八日市場町ニあり 福嶋といふ御師） 家宝なり 土佐
光信か筆にして彩色あさやかにして人物さいに逼まり
近比 有徳大君台命に依て上覧に供へり

光明寺残編

信誠上野入道か自筆軍中廿日記勅制軍法

と標題せり　今世水戸黄門光圀卿ハ字しと称し
昂参考太平記ニ何某光明寺残編と云と記し
頭ハ此書全部ありしハ僧ハ一代僧侶在世にせし
功なりと云　これ後世延臣神主の鈴止を成ぬ由となりし水戸侯ゟ
給ぬ是名酒一樽を謝義として給へりと云

聖濟總録

此書宋徽宗皇帝ノ勅編集にて醫書全部
二百巻治方二万余首書五として詳富なりしかも明朝
に板刻して其書帝ありし日本に宋板二部有一部ハ
半井氏一部ハ久志本家の重宝として秘蔵せしとか

道明今に存せりと久遠は其なりハ二部被傷して
修補を施し今は一部ハ落ちたりとや

世宝鷄鵡抄

此書境家の臨書にて全部百巻寛文の
頃此書ハ一代盧儀と云人歌学に富て今京本
の教ニ歌書ハ編述しけ鷄鵡抄に
古語ハ記し如何と本且名家の傍を紀して
菅稿と存し三代ニ及て全書なり近頃烏丸
光栄卿へ持参せし　霊元帝ハ叡覧を給ハるや

三日毎宙に舞ひし處感ありて実に世於て宝なりと
御暦当時しる候ふよし世宝と存ずらし

天國太刀

山田大路家於宝なりと紀氏名草郡より奉
納有し来由記り伝へり旧家なれば家宝数多あれ

秀郷佩刀

世古懐應存かり涼井平右衛門（山田一之木町）家に伝へて
和比有徳太君於上覧に供へりけし製古抄して

弄ぶり諸を入中心（ナカゴ）竹毛さめるとの反りまつ出に出
なりしう元は行列の借士赤堀某とやらん人の家内
出て其来由明なり源義朝の太刀と共に研刀
師に命せられ東武にわいて其はさは極め給へり

義朝佩刀

朝然岳の什物（然岳旧記）伝来國助包作と銘有外は太刀と
共に上覧に供へてさいに極り白鞘にして古物の儀は別子
なし給へり伝へ云薬屋野間宮ゟ於は義朝の后者
ゆて義朝満毛の後は太刀をまつり来りしと云

東岳隆念を持去れりと云　有徳大君御代ニ
御庁神部より返りしハ三尺余ならすして日預ニ出
上覧被仰付ありしなり

鷄の丸

山口信濃家（山田岩淵町 延住神主家）ニ傳りし清貞赤穂城主長家
の臣なるを手納ありけり法保平被献ニ寄り長家ノ傳ハ神
家光より鷄被下（頂ハ今より宗家ヱ返せ）一ツハ
少身ニ而（是ニ而）御頂被仰て今に傳り東鑑
ニ鷄ノ丸咲丸と見へたり

清盛公雛刀

地長絵大夫（山田中之郷）家ニ傳ハ清盛公の御師なりし由緒
あるに依て少身ニ而甚歓のこと今に不返返しと

信玄佩刀

幸福出雲家ハ（山田八日市場町）武田家の御師にて晴信と云
（一代ハ信玄の事）ニ甲斐一国士庶武米寄進等の
御師にて佩刀長船（二字寄平と銘有）寛文の少身
ニおいて一度城の中ニ寄せ被寄附て今ニ近傳り有之候の

馬具書札の類ハ数多あれハ略記せす

朝霧太刀

松本御所家臣山田中町に伝へけし太刀か寛文のころに
焼亡てなしといへとも其事跡ハ今に存せり

平氏軍旗

志摩国答志郡和具村にあり此旗ハ平家より伝来して珍蔵し
蝶の紋神号一行書経法に書へり并此城主松平源三郎
世に言伝ふ後藤左中将殿盛衆神道の家臣水野某に蔵て

一首の民屋に在へつる氏神の社殿に納むとし
と今ハ其外しかり寛永文治の年間平族家に存ありり
其末葉武田御当家に伝へしか皆敷奏せり
此村の近辺黒里といふ山里にて他の人要用
あれハ[illegible]此旗を軍陣に立て陣ハ勝利
ありし此軍旗か後に此村に持し時ハ七千人も
せしか社内に納て温泉なと彼旗腐せしとか

澤渓琴　村菓琴琵

志摩国答志郡国府村[illegible]一の琴は伝来ハ元老

土井大炊頭の家士なる真清土井常書の妻女
利益君の女なり妙花といひしは容儀麗しき仕へし女性
早世の後此寺に送り付物となりし侍へ云平重衡
謀食し頼朝の為に囚はれ侍女千手か書つさへ重衡
鎌倉に来り琵琶を弾きし名高き事にて土井君南都にて肥の唐琴
に擬し彼の後此寺は法花宗にて今は彼の深く秘蔵に
せしかは此を寄りつちへ奉りて云事葉を清書也
の付物に村菊付琵琶琵琶といふめい野行長明の秘記
なりしか村菊と謂ひなき黄鵺の声柳に謂りお菜の琵
琶を覆ひし其上近世数多ありて庵の名も若干ありと云

古墳部

泉式部墓

山田町上町光明寺也教と云の奥山東の寺地に
在此あるは光明寺と申の後なりて若山村奥山に経報
尋ありと申此境内没しは藤原保昌の一館の名
となり光明寺と五の川勝の村是の勝也しの古跡
若山を越て申境を云は此旧論もえ今墓花のあし

結城上野入道墓

昔の侍ハ慚愧して太平記よけ人常に折首（おりくび）とて楽
地獄に堕しと見えたり曰参考に伴路山田啞と云
ふ者白道留に病みかゝり死ん年七旬其子宮内少輔
親朝結城承昌に翻見りて見ゆ五月廿二日参考に宗藤
あれハ葬に難しかりし之明寺寺に立しも旅に居る
その其子あハ平りかきし又寺に　結白河三郎が陵として
碑あり一代の住僧寺主の願を遣はしめ呼ぶ御里附ぐ
建しと云亦小田原よりの碑昔い々ふ文字難分り

福原右馬亮墓

朝無村の水杉原境内に在慶長七年関原後軍
の時御師師福田太夫（山田一志斯）名のに康来り隠遁
したる関東様軍士又福田の者と同じ福田照く
防ぎしも不捷取る猪の付ぬ東むじ福田是に
師まじ討手を案計して福原神朝無に退かしめ
終に討死を及へり福原これ朝を恨て曰長袖の侍
相むかひとらしかし此者共に若御さは我仰候べき
原きたに依て寺に掛くハ当世に其辺恨なりとて
自殺せしとなん家臣二人も自ら痛く働き都督地を
せしと云ふ此碑高サ四尺余横弐尺并昔むして

文字ハ明ニ読かたく寺僧に乞ふて写せり、

一任殿順積道蘊禅定門　濃州大垣城主福原右馬助

慶長五年十月二日　又心哲一諾居士　家臣神

原喜三郎　又真得如珍居士　家臣　姓名不知

秋田城介墓

右同所にあり今ノ奥刕三春城主秋田氏か祖なり

ある頃不忠の罪に依て家にあつけられて蟄居

か万治二年己亥なりき三春侯より祠堂料を寄

せられ酒掃をもさせ代々使を付て有しとなり其碑ハ

石所に構して　高乾院殿前侍従空巌

梁宜大居士万治二年己亥十一月廿九日

安部實季入道と記さる生前歌道を長し

能書なりしか其真蹟の写し

栖の侍より夕荻とくへる物かたりのはしよりせしも乱　梁空

まつ墻の花とのみ見るまゝにかきわけ此の道摘つゝ

よそにのみ見てかなしき命の色もありなん

の殊に帰るかゝる其思ひ出して涙のみ

住ことやしと思ふて心はか

たちの人の眉をはかり

梁空室に葬る其碑に云く姫女の法号
永松庵と云ふ妹ハ尼なり其字
月峰睦童女 寛永十四年三月廿六日没十一歳
俗名阿千（オセン）又空清院印月昌光禅定尼
承應元年壬辰十二月三日没 侍女

二見古墳

汐合の西川端に武人の石碑あり里人ハ此を隼人
塚と呼ぶ(?)近き乱世に南谷の長沢村隼人と云人爰に
て討死せし誌なりと云ふ彼村に武則(?)紋(?)隼人の墓(?)

二見を落合(?)と云ふ遠くハ其村此の事ありしも(?)
又多気郡川上と名つく(?)の(?)九鬼氏とは(?)遠くて(?)残
カりしとも云

西塚

度会郡勝田村に在 昔ヶ云伊勢三度の北名松(?)
曹王(?)と云ふ人名を並べ(?)傳へ云此処に首(?)の西天
より降りける故に云其西ハ今小勝田の家(?)に
と在く 曹王ハ垂名(?)にて人名にあらずと云

土産部

長鰒（のし）

毎六月朔日志州国崎（クザキ）村より西宮へ長鰒献上の例ありノシザキといひ又サゞエザキとも云り今ハ菜際（サイエ）まで伊勢の事なりし延喜式に御厨（ミクリヤ）鰒（アハビ）とみえたり

毎正月東武へ献上の料ハ長三尺余巾一寸余

其余数品あり昔ハ鰒と有ハ是なるよし

真珠

俗鰒玉といへど其貝ハ蛤に似て蚌（ドブガイ）とふ貝なるにやけふ見る所の事ハ長崎なり價貴し西土までハ玉冠なるよし昔長崎より渡りて伊勢志珠といへど実ハ志摩英虞（アゴ）郡の産なり又尾張志珠といへどあれども其粧者り貝の品劣れりとぞ肥前大村の産亦佳なりと云り

前海鼠（いりこ）

上古ハ貢献なり今ハ志州の浦々神都に貢

有瀧村より多く長崎へ送り唐船に積しと云へ

海鼠腸

貢献の第一にて醢の佳味にて最上とせり
多羽候より献上となる

小貝醤

鮑の一二寸計なるを醢とし是も献上の一種
取り浸入る鮑は小なるはあふ以て是は形よ
生して取るなと

鰷腸

宮川五十鈴川に鰷多し其腸是なり甚佳味
なり鰷は五十鈴川にて生するを以て腸もよしとし

鮞腸

は魚子にて干鮞といひ多羽より献上となる
其腸のみにかに等し

鯨

紀州熊野浦より出る其身白なる皮のごとく
刻て製して塩の極寒に至秋冬法國

近国他邦伊勢鰹と賞せり

干鰹（カツヲブシ）

神都多将にて製造すれとも紀州熊野より多く出せり皆混して伊勢干鰹と云

鰹鼓（カツヲノタヽキ）

鰹の臚を去き骨去きの二種あり献上とある

鯷（ヒシコ）

鰯は一二寸斗のものは生者にて塩漬とせり献上とあるもの干たるは田作りと云ふ屎（コヤシ）とするを謂なり

糀漬或は小鰯のことにいふものなるよし

鰡（ホラ）（イナヨシ）（イセコヒ）

日本紀に久知女と有ハ是なり此地に捕ふて多し脂肉ありて干なめかラスミとしかス又鰡は漁川にて他国に多く送れり

（此は鰡子ハカラスミと有此地多く出るよしなり）

鮫（サメ）

鰄（タレ）

九段比化と云 鰒の身を殺斤に蔵法に漬、干黒め
名云神事皮並蔵衛各代の食膳なとに盛る
俗フクツといふ干物とふとりて用ゆる例もあるや

干貝

和名抄に貽貝伊加比干黒て俗に近百と為
ハ女陰に似たり本草に東海婦人と有又陰貝と
云ふ者又ハイノカヒと唱へり

鯛 鰕 栄螺

此類多し鮭鯖鰹の類ハ代々是を略す

鹿尾菜

伊勢物語にひじきもといふハ是なり志段浦
の産ハ上品也平戸瑞浜比さんきハ画て宋なり

稚海藻

いろへ貢献せし一種なりも献上となりて其品
甲乙あり志段坂浦の産ハ上品なり價い
常に十倍せり又糸和布撰和布とい者

和名抄ニ近木末と有

渉鬣（アヲノリ）

貢献、右京右同し宮門下総州と交易の事まする佳といへしと志州神前（カンザキ）浦の産紀伊侯より献上あり

滑海藻（アラメ）

貢献、右同し浅体みしく委多く能ありく

云ふ

神仙菜（アマノリ）

神書にあるは上品とし献上せし一種なり色粗も多し

鶏冠菜（トサカノリ）

和名抄ニ土里佐加乃里と有家体なりさなと佳品なり

海蘿（フノリ）

上古ハ今のし正〻今シエ人日用ハ[illegible]し紀ハ[illegible]

事多し、

於期菜（ヲゴノリ）

和名抄に見えたり又煮食にもちゐるも粗料なり

黄茶

宮門の上河俣（カハマタ）村より出るは上品とす其品多し

有徳大君紀州に座ス時にありけ此の茶を賞し給ひ

献上となりけるより書直入門上茶とよびてたえしぬ

干瓢

宮門の下吉向村より出るは上品とす六月土用

中に製したるは土用むきとて常のより其斤重く

枇杷色なるは勝れり色白く薄きは劣れり

果蓏

柿殊に多し其品多かり又宮門の上より

串柿として江戸へ送る又夏多し蜜柑紀伊国

有らん瓜亦其品多なり宮門の下加茂村上条

村於号は勝れりとす西瓜亦然り

氷餅（コホリモチ）

朝熊岳にて年中に製し献上するなり諸国へ傳ふ

輕粉

伊勢ハハラヤ白粉と云多氣郡射和村より出る所
水銀にて製し其製法秘密とし容飾其具とせし
昔ハ射和村の名産を水銀出しといへとも今ハ其所絶
なし

万金丹

諸国に普く有る朝熊岳野間屋か家法なりとぞ
受領して野間因幡様と云ふ妙見町に出店有

小西万金丹

山田八日市場町にあり享保年中小西大和大掾
之受領す家法治香散と云小児の薬
万金丹よりも能行へり

神仙丸

神仙解毒丸と云ふ久志本家の良方なり藥
ともさかんなれとも東武にても能く売れり

伊勢暦

諸国に祈祷大麻を配る所縁は其後は公庭よりも御尋問ありし神儀は常に天下泰平五穀成就の為に祈りまいらする種々の祓并時候など農家に示しめ其附など書くへなくしからぬ例にして大麻を配る事来りしと云義しまれは公にも祈祷を離れまじと暦を遣はりしとぞ

伊勢椿

天武紀に椿と海石榴
とかくへ書り

多気郡丹生村丹生神社の境内に椿の古木有義ともいへば猶書しるに及ばず此は花形余りて至愛けし今は津の国には椿多しといへども是は椿より出しつると云今は其古木は枯て蘖を生なり

伊勢櫻

此花は伊勢にして八重桜の如く桜は宮の故事に関て伊勢は本朝桜花の本なりといへば名目詳にすべし

廿宮、盤

一 府宮村より出る軽く多く作出て、貴遠用人形花ござ
けるもありおやらし

竹皮籠（タケカワゴ）

山田もはし良工多し長槌採竹籠の類甚し
品ハ價貴く京江戸までも倍する也

川清庖丁

山田川清よ鍛工多く刀剣作出り俵する云
果平川て粗なれ大小共能よて使ひよ好めり

汀

大濃より鍛工多く濃刃とて甚形少し作よ良き

唐

太刀性細密にして能く焼刃少し水氣も含む
專脇もよし

楠部 太

楠部村より出る陶甚多く赤黒からハフスベ 太れ
京細かなる砂を含む擂（スリ）鉢抹し焼れ上壊

り用ゆ近比茶人ハ来るを好みに叶ひしと云
用ひて今ハ代々是を用ゆ

炭

南国紀州領より出る宮門と云ふし日高郡横熊野
炭と云ふ

漆　器

木曽日光山より出るもの類有して至重く性悪し
多く他邦ハ是を用ゆ

箸　著

竹箸ハ好みて諸国よ出る産として来客人ハ於
出産をせり

櫛

国府所にて良工多し其品数有りて代々ハ
是あり

単皮（タヒ）

さしきハ諸國に松阪しといへる大縞ゑさし
縷さし數多金さしの數他ニ見へ有り

紙 まんさいへ

道路ハりまて多く代出ニ賣渡りて世人知る

木綿嶋

松坂嶋 松坂木綿市場木綿の數價も至て多く
江戸ニ送リ又諸國の數ニ弘まり殊ニは
あまねく也けれ也ニ於かく二文易ニ取ハ大店有りて富

飴

宇治ニて製造ハ其處なり陳ハ武士人ハ
参宮ニ來ル者を指し取り求て土産ニ仕るなり

饂飩

麺類ハ皆他國ニ劣りしといへども製法
他ニ多く勝れり殊ニ茶店ニ沽ハ二文粗ニして至
なりけり

蔡忠告か著せる宮川夜話草三巻は
寳暦のはしめに冊稿なりしを吾父なる正川神主
を得たりし頃志ありしとめて語らひしに彼
書き終よりしのちに論あり（削りなをな
し語らひ書写か又月はかりしておほくし又以
よ遠一向更も打捨しおきしに今年さいつ頃
りのはたゆ後ますますもいとふ父か常神さり
ましゝ後に彼書もあしきゝへうしおかし
あれしき人の披読あたのはつゝ乞に應りて

浅草文庫
日本政府図書

又右とも外に小書之とふらくいゝめたまはしかしか
いられけれハおやけ書のけしかしこよおもふさしり
あまたはあまた姿佳侍へハおかしきあいなきことき
みなめとなりきおもちゑ後つまおほかたく
今やりし兄まれこしを姿佳出て而哉
ふしすし庭とも文補ひてこそ見ん
これこゝろえまなし侍りてさしよえを姿
まいうらしなつけ可されハまへよ
あおいはいましく料稿しるし今は由これむ
かくせよと云尓

安永二癸巳年八月

権禰宜従四位下度會神主正[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan